

主  
は、主

Unser HERR lebt

2016  
graph magazine Vol. 42

Unser  
HERR  
lebt

Unser  
HERR  
lebt  
主  
は、主

まことに、まことに、あなたに告げます。  
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ3・3)

vol. 42 定価100円(税込み)

### メッセージ

- 4 奉仕のための備え ゴットホルド・ベック

### 10人の証し

- 20 己の悟りにたよるな、主に拠り頼め 堀田満
- 30 主であるわたしが神である。ほかにはいない 堀田真由美
- 41 解放奴隷 石黒郁彦
- 45 悲しむ者は幸いです 石黒まり
- 52 イエス様との出会い 藤田憲子
- 56 主がくださる鞭と杖 浜崎伸夫
- 64 感謝します。この恵みに 浜崎祐子
- 73 主からお受けした無償の恵み 古川瑞夫
- 79 滅びの穴から光の中へ 古川朋子
- 87 求めていた真理は聖書によって見出しました 新妻和子

# 奉仕のための備え

ゴットホルド・ベック

今回は、奉仕のための備えについて学びたいと思います。

「二タラントの者も来て言った。」「主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもつけました。」その主人は彼に言った。「よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさん物の物を任せよう。主人の喜びとともに喜んでくれ。」

(マタイ 25・22～23)

主にあつて愛する兄弟であり、忠実な奉仕者である  
テキコ  
(エペソ 6・21)

けするかではなく、どんな「動機」とどんな「力」で奉仕をするかです。

「ゼロ」という数をご存じでしょう。温度計の「ゼロ」はプラスとマイナスを分けています。聖書の中で言う「ゼロ」は十字架です。十字架は、奉仕が一時的なものか、または永遠に続くものかを決めます。神のしもべが十字架を自分のものとして体験していれば、奉仕は実を結ぶものとなるはずでです。ですから、奉仕者にとっては、どれだけ十字架を体験しているか、また十字架に対する心の態度がどのようなものであるかが大切です。

主イエス様の十字架の死は何を意味しているのでしょうか。キリストが身代わりとなって、私たちが当然受けなければならない刑罰を受けてくださったことによって、私たちは赦されていることを意味しています。

「ローマ人への手紙」6章は、罪の力が打ち碎かれ

奉仕のための備え

イエス・キリストを信じている人々の中に、神に仕えると言いつながら、実は目的を自分におき、この世的方法によって神に仕えている者がいることは重大な事実です。

その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。「主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追ひ出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。」しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。「わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。」

(マタイ 7・22～23)

イエス様にとって大切なのは、私たちが何をどれだ

て、私たちの古い人がイエス様とともに十字架につけられたことを教えています。この事実を見ると、私たちはすべてを主に明け渡し、主に仕えていこうと決心します。しかし、そのように決心して主に仕えていくうちに、それは自分の力では不可能だという7章の体験にぶつかります。この7章を通して教えられるのは、自分の力で主に仕えることはできない、主である神ご自身が私たちを通してお働きになるのでなければ、その奉仕は虚しいということです。

ところが、ここまでのすべてを体験したとしても、主に仕える奉仕の準備が完全に整ったわけではありません。私たちが真のご奉仕にふさわしくされるために、三つのことについて考えましょう。第一は「魂の中の闘い」、第二は「理想的な学校」、第三は「ご奉仕の秘密」です。

## 1 魂の中の闘い

まず第一に、魂の中に闘いを感じなければなりません。主イエス様でさえ、魂の闘いを感じになりました。イエス様はいつも御父のみことばだけを為(な)そうとされましたし、またそうしておられました。イエス様はご自分の意思をもっておられました。いつも「わたしの思いではなく、父よ。あなたのみこころをなさしてください」という心の態度をもって地上の生涯を全うされました。

荒野でサタンはイエス様を試みましたが、いわゆる殺人や、姦淫などの大きな罪にイエス様をいざなうとはしませんでした。ただ、父の御心とは関わりなしに、勝手に何かをやらせようと試みたのです。しかし、イエス様は「子は……自分からは何事も行なうことができません」(ヨハネ 5・19)とご自身で言っておられます。これこそ、イエス様の実り多いご奉仕の秘訣だったのです。

栄光のように見えた。私はこれを見て、ひれ伏した」(エゼキエル 1・28)と語っています。

ダニエルは「私は、ひとり残って、この大きな幻を見たが、私は、うちから力が抜け、顔の輝きもうせ、力を失った」(ダニエル 10・8)と告白しました。ペテロの場合は、彼が主を知らないと言いつつ、主が振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、「主が振り向いて、あなたに、三度わたしを『きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは、三度わたしを知らないと言う。』と言われた主のおことばを思い出した。彼は、外に出て、激しく泣いた」(ルカ 22・61-62)とあります。

パウロは復活された主の光に照らされて、「地に倒れ」(使徒 9・4)しました。ヨハネはパトモス島で主にお会いしたとき、「その足もとに倒れて死者のようになった」(黙示録 1・17)のです。

このように、主が私たちの心の目を開いてくださるとき、私たちは自らの憎むべき姿を知って地に倒れ

私たちは、まったく従順こそが実を結ぶ秘訣であることを単に知識として知っているだけでは十分ではありません。主が私たちの弱さの一つひとつに御手を触れてくださり、「これはあなた自身から出たものであり、私から出たものではない、これは改めなければならぬ」と教えていただかなければなりません。

私たちは主の御目に映る自らの真の姿を知って、私たちの内の何が肉的であり、何が霊的であるかを見分ける必要があります。これを見分けるには、上からの光に自分自身が曝(さら)される以外にありません。この光に出会った預言者たちの様子を聖書から見てみましょう。

イザヤはこの光に会ったとき、「ああ。私は、もうだめだ。……万軍の主である王を、この目で見たのだから」(イザヤ 6・5)と叫びました。

エゼキエルは「その方の回りにある輝きのさまは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、それは主の

伏します。しかし、主が心の目を開いてくださるなければ、私たちは自分がどんなに惨めで、哀れで、憎むべき者であるかを、知ることができません。

主のことは光であって、すべてを明るみに出し、神に逆らうあらゆるものを焼き尽くします。みことばの光に会って自分の真相を知らされると、自分の力により頼むことができなくなります。イエス様は「わたしは、自分からは何事も行なうことができません」(ヨハネ 5・30)とおっしゃっておられます。私たちも主と同じ心の態度をもち、主に完全により頼む者になりたいものです。そうなることによってのみ、主イエス様は私たちをまことの弟子と呼んでくださるでしょう。しかし、そうなるまでは「魂の闘い」が続きます。ここでペテロの例を見てみましょう。

ある日イエス様が「わたしをだれだと言いますか」(マタイ 16・15)とお聞きになったとき、ペテロは「あなたは、生ける神の御子キリストです」(マタイ 16・

16)と答えました。イエス様は「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です」(マタイ 16・17)と答えられました。それからあまり時間のたたないうちに、同じペテロに向かって「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」(マタイ 16・23)と激しいお叱りのことばを放っておられます。

サタンはどのようにしてペテロの心を侵したのでしようか。また、サタンはいかにして私たちにその力をふるのでしょうか。サタンの力が及ぶか及ばないかは、私たちが自らによって自分を支配しているか、または御霊に支配していただいているかによって決まります。もし、私たちが自分を「魂の支配」にゆだねているなら、すべてのことは自分の興味、利害、満足のために為されていることになり、この世のものを土台にして

動いていることになります。このようなとき私たちは、ペテロと同じように、十字架に向かって行くイエス様をとどめて、イエス様からお叱りを受けるようなことをし続けてしまうでしょう。もし私たちが「御霊の支配」だけを受けているなら、私たちのすべては主のご関心、主の喜び給うことだけに向かうはずで、神の喜び給うこと、神が心に留めておられることは十字架です。十字架を通してのみ、神はご自分の目的を達成なさいます。十字架から離れ、世と妥協するのはサタンのいざないに他なりません。ペテロは自分の興味、自分の思いを通してサタンと結びついてしまいました。このときペテロは自分に頼り、主により頼んでいなかったのです。

またイエス様が逮捕される夜、「あなたがたはみな、今夜、わたしのゆえにつまずきます。・・今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います」(マタイ 26・31、34)とおっしゃったのに対して、ペ

テロは「たとい、ごいつしよに死ななければならぬにしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません」(マタイ 26・35)と主イエス様に対する熱い思いで言いました。このように自らに頼るということは、サタンに結びつくことを意味します。

私たちも、死をいとわず主に仕えたいと決心してご奉仕しますが、後になって主の光に照らされたとき、それが自分の力でなされたことに気づきます。真の奉仕がなされるためには、「魂の中の闘い」を経験し、自分の力により頼むことをやめなければなりません。

## 2 理想的な学校

魂の中の闘いを経験し、主だけにより頼む真の奉仕者にされるには学びが必要です。では、奉仕者が学ぶ「理想的な学校」とはどのようなものでしょうか。自分のため、自分の興味と意思で奉仕すること

をやめ、すべてを主にゆだねてことを為す人々を造る学校です。

パウロは、生まれながらの素晴らしい能力と高い学問・教養を身につけていましたが、彼には「まことの奉仕者」としての備えはありませんでした。復活の主に出会い、備えるべきものを備える者に造り変えられた後、パウロは次のように言っています。

なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。

(1コリント 2・2、3)

先に私たちの古い人はイエス・キリストとともに十字架につけられてしまったことを述べましたが、今ここで問題にしているのは、私たちの古い人ではなく、

「生まれながらの人」「生まれながらの能力」です。

私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。  
(ヘブル 10・39)

これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。  
(1ペテロ 1・9)

あなたがたは、忍耐によって、自分のいのちを勝ち取ることができます。  
(ルカ 21・19)

これらのみことばは、私たちの「魂」は「古い人」のように死ななければならないのではなく、「救われなければならない」、つまり魂が絶えず御霊様の支配のもとになければならないことを言っています。

今ここで四つの聖書箇所を学んでみましょう。これらを見ると、私たちの「魂の働き」がどのような

ものか分かります。そして私たちが自分勝手な生活から免れる方法としてとるべき道は、ただ、日々自分の十字架を負って歩むこと以外にないと教えられる。

#### (1) マタイの福音書 10章34～39節

わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っ  
てはなりません。わたしは、平和をもたらすために来た  
のではなく、剣をもたらすために来たのです。なぜなら、  
わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅう  
とめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の  
者がその人の敵となります。

わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわ  
しい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を  
愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。自  
分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたし  
にふさわしい者ではありません。

#### (2) マルコの福音書 8章32～35節

(イエスは)はつきりとこの事がらを話された。すると  
ペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。し  
かし、イエスは振り向いて、弟子たちを見ながら、ペテロ  
をしかって言われた。「下がれ。サタン。あなたは神のこ  
とを思わないで、人のことを思っている。」

それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び  
寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来た  
いと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そし  
てわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者は  
それを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は  
それを救うのです。」

主のみからである教会にとって、「妥協」によって  
生まれた一致は何の役にも立ちません。主イエス・キ  
リストに「ふさわしい者であるかどうか」が問題です。  
イエス様が十字架に向かう道をはつきりとお話し  
なさったとき、ペテロは自分の思いに囚(とら)われて  
いました。次の聖書箇所を見てみましょう。

主イエス様が十字架にかかるために進もうとされ  
たとき、ペテロはイエス様をいさめました。ペテロはイ  
エス様がいのちをお捨てになるのを欲しなかったのだ  
です。私たちはこのペテロに似ているのではないでしょう

か。自分のいのち、自分の意思を主に明け渡そうとせず、自分の思いを通そうとします。ペテロはイエス様に「どうか、自分のいのちを大切にしてください」といさめました。

しかし、イエス様はただ父のみころだけを思っておられました。その心はご自分の感情、思い、満足に向いていませんでした。ですから、主イエス様はおっしゃったのです。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。」(マルコ 8・34-35)

私たちはどうでしょうか。私たちは一体どれほど主のみころを愛しているでしょうか。私たちは主のみころを行いたいと考えますが、えてして主への十分な「愛」がともなっていない。主イエス様の喜び給うこと以外のなものをも欲しない者になりたいも

口トの妻を思い出さない。自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。あなたがたに言いますが、その夜、同じ寢台で男がふたり寝ていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。女がふたりいっしょに臼をひいていると、ひとは取られ、他のひとは残されます。

ここで主イエス様は、ご自分が再臨される時のことと語っておられます。口トと家族は、罪深い町ソドムとゴモラが滅ぼされたとき、そこから助け出されました。再臨のときも同じように「ひとは取られ、他のひとは残されます」と告げておられます。そして、イエス様が「口トの妻を思い出さない」と言われたみことばに注意しなければなりません。なぜ主はこのようにおっしゃったのでしょうか。「自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます」と続けておられます。口トの妻

奉仕のための備え

のです。

ペテロはイエス様のためを思って主をおいさめしましたが、それは主の目には不純なものでした。ペテロは神のことと自分のことを半々に思っていたからです。ですからイエス様はペテロのことばがご自分を愛する気持ちから出たことを知りながら、「下がれ。サタン」と厳しくお叱りになったのです。私たちは純粹に神のことだけを思う者でありたいものです。

次に口トの妻のを見てみましょう。

### (3) ルカの福音書 17章29-35節

口トがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。人の子の現われる日にも、全くそのとおりです。その日には、屋上にいる者は家に家財があっても、取り出しに降りてはいけません。同じように、畑にいる者も家に帰ってはいけません。

は滅びから助け出されたにもかかわらず、この世のことを思い、後ろを振り返ったために塩の柱になりました(創世記 19・26)。私たちは、再臨を思い、イエス様に携え挙げられるのを楽しみにしているのでしょうか。主の喜び給うこと、主のみころ、主の思いが私たちの生活の中で、第一の場所を占めているでしょうか。そうであれば幸いです。

また「ひとは取られ、他のひとは残されます」というみことばを、私たちは真剣に考えなければなりません。主が再び来られたときに地に残されないために、私たちがどのような備えをしなければならぬかを、主イエス様は教えておられます。

だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。

(マタイ 24・42)

意識して主に従わず、主のみこころに反して未信者と結婚する人、地のことを思い、自らのために自らの力でご奉仕をしている信者は、主の再臨への備えができていたとは言えないでしょう。もし「主がすべてである」なら、主の再臨に備えができていたと言えます。

私たちにとって、主からいただいた賜物が、主より高い位置を占めてはいないでしょうか。また、私たちのご奉仕が、主ご自身より高い位置を占めてはいないでしょうか。これは大切な質問です。

私たちは十字架によつて、あらゆる人間関係、あらゆる事柄から解き放たれ、ただ主と主に関することだけに結ばれているでしょうか。もしそうならいいなければ、主の再臨は私たちにとつて喜ばしいものではなく、恐ろしいものに感じられるに違いありません。

主の教会を愛し、教会のために闘っていたパウロは「私は神の熱心をもつて、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処

女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです」(2コリント 11・2)と言っています。もし、結婚することになっている花嫁が他の男を愛していたら、花婿は決して快く思わないでしょう。私たちは十字架を担い、主が再臨なさるとき、主とともに喜び合うことができる者になりたいものです。

#### (4) ヨハネの福音書 12章24～25節

まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保つて永遠のいのちに至るのです。

ここで「自分のいのちを愛する者はそれを失い」と書いてありますが、この「いのち」は「魂」という意味

です。魂は、自分の興味、自分の意思、自分の思いを

意味しています。「一粒の麦」は主イエス様の御姿を表しています。麦粒はいのちを宿していますが、地に落ちて死ななければ、いのちが現われず、実を結ぶことはありません。同じように主イエス様は永遠のいのちを持つておられました。もし死ななければ麦粒と同じように、そのままだったはずです。イエス様は私たちの罪のためだけではなく、多くの実を結ぶため、ご自分のいのちを分け与え広めるために十字架の上でお亡くなりになりました。

パウロもまた実を結ぶため、イエス様の死の様と等しくなり、魂を死に渡し、自分の内にイエス様のいのちが現われるように努めました。パウロは次のように書いています。

私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬ

べき肉体において明らかに示されるためなのです。こうして、死は私たちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのです。(2コリント 4・11～12)

これこそ、実り多いまことのご奉仕の秘訣です。もちろん、新しく生まれ変わった者は永遠のいのちを内に宿しています。しかし、今日どうして、内に宿しているいのちを外に現わしていくことができず、打ち負かされた、勝利のない、喜びのないクリスチャンが多いのでしょうか。それは、自分の興味、思い、意思といった魂の働きによつて、あたかも麦の実が麦の殻に包まれているように、内に宿しているイエス様のいのちが包み込まれ、殺されてしまっているからです。

主イエス様の弟子たちのことを振り返ってみましょう。ヤコブとヨハネはイエス様に従わないサマリヤ人の町を見て、天より火を下して焼き尽くすように主に願いました(ルカ 9・54)。ペテロは、死んでも私はイ

イエスを拒まない、と自分に頼り豪語しました(マタイ 26・35)。他の弟子たちはお互いに言い争い、誰が一番偉いかを論争しました(マタイ 18・1)。

しかし、そのような弟子たちが十字架を経験し、甦ったイエス様に会い、聖霊を受け、まったく違った人に形造られていったのです。彼らは自己に死に、愛に満ち、忍耐深く、謙遜で、恐れがありませんでした。彼らにとって血や名誉や自分の栄光、成功、人気などは、もはや問題ではありませんでした。聖霊によって、彼らは岩のように固い自我から解き放たれ、御霊に導かれる生活に入っていたのです。

### 3 ご奉仕の秘密

最後に「ご奉仕の秘密」について考えてみましょう。ある人々は自分のことだけを考え、またある人々は主イエス様に喜ばれるにはどうしたらいいかと心を用いています。またある人々は何の喜びもなく、無理に

聖書を読みます。一方では、みことばから喜びと力と導きを得るために期待をもって聖書を読む人がいます。なぜ信者の間にこれほど大きな開きがあるのでしょうか。また、自分のことばかり考えていた弟子たちが、後になってどうして、あれほど変わったのでしょうか。「マルコによる福音書」8章34節にその答えがあります。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」。弟子たちは復活されたイエス様に出会った後、十字架を担って自らをそこにつけたのです。

自分の十字架を負わず、この世での立場や名誉、評価を考えている信者は主のみこころに適(かな)わず、イエス様はそのような人々に「お前はわたしにふさわしくない」、「わたしの弟子になることはできない」とおっしゃるでしょう。

自分中心の生活は日々十字架につけられ、イエス様

のいのちが私たちの生活を通して現われてこなければなりません。このことをさらによく知るために三つの例話を取り上げてみましょう。

#### (1) アロンの杖

はじめはアロンの杖です。

主はモーセに告げて仰せられた。「イスラエル人に告げて、彼らから、杖を、父の家ごとに一本ずつ、彼らの父祖の家のすべての族長から十二本の杖を、取れ。その杖におのおいの名を書きしるさなければならぬ。レビの杖にはアロンの名を書かなければならない。彼らの父祖の家のかしらにそれぞれ一本の杖とするから。あなたはそれらを、会見の天幕の中のわたしがそこであなたがたに会うあかしの箱の前に置け。わたしが選ぶ人の杖は芽を出す。こうしてイスラエル人があなたがたに向かつてつぶやく不平をわたし自身が静

めよう。」

モーセがイスラエル人にこのように告げたので、彼らの族長たちはみな、父祖の家ごとに、族長ひとり一本ずつの杖、十二本を彼に渡した。アロンの杖も彼らの杖の中にあつた。

モーセはそれらの杖を、あかしの天幕の中の主の前に置いた。その翌日、モーセはあかしの天幕にはいつて行った。すると見よ、レビの家のためのアロンの杖が芽をふき、つぼみを出し、花をつけ、アーモンドの実を結んでいた。モーセがその杖をみな、主の前から、すべてのイスラエル人のところに持って来たので、彼らは見分けて、おのおの自分の杖を取った。

主はモーセに言われた。「アロンの杖をあかしの箱の前に戻して、逆らう者どもへの戒めのため、しるしとせよ。彼らのわたしに対する不平を全くなくして、彼らが死ぬことのないように。」モーセはそうした。主が命じられたとおりにした。(民数記 17・1-11)

アロンは本当に神から召し出されたのか、彼の奉仕はまことのご奉仕であるかが疑われていました。それで主は、誰が召しに適うまことのご奉仕者であることを示すために、十二本の杖を各族長から集めさせました。一晩たつてみると、アロンの杖が「芽をふき、つぼみを出し、花をつけ、アーモンドの実を結んで」いました。アロンこそまことのご召し出されたしもべであることが明らかになりました。

一晩中、杖は真つ暗で人目につかないところにありましたが、翌日には芽を吹き、実を結んでいました。私たちも真つ暗な死の経験を通つてはじめてまことのご奉仕者となることができるのです。死によって「甦り」と「いのち」がもたらされ、暗い内を通されてはじめて「実」を結びます。

## (2) ペテロ

はじめ、ペテロは自分により頼み、「たとい、ごいつしよ

に死ななければならぬとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません」(マタイ 26・35)と言いました。また剣をふるつて、イエス様を捕えに來た兵隊の耳を切り落としてしまいました(ヨハネ 18・10)。しかし、主はこのようなペテロを用いることはおできになりませんでした。ペテロは暗いところを通らされなければならませんでした。自分が否んだ主が十字架につけられて死んでしまつてからの三日間、ペテロは深い絶望と暗闇の中に落とされました。この体験が、後のペテロのご奉仕に重大な影響を与えたのです。

## (3) ヤコブ

最後にヤコブの例を考えてみましょう。イサクの子であるヤコブは主に仕えようと願い、神のみこころを為そうとしましたが、それは自分の力によるものでした。自分の力は砕かれなければなりません。

彼は主に叫んで「私はあなたを去らせません。私

を祝福してくださいさなければ」(創世記 32・26)と

言いました。これは実に激しい闘いであり、これによつて彼の腰の骨は外(はず)され、自分の力で歩むことができなくさせられました。つまり、自らの力が砕かれたのです。そのとき以来、彼の名は「欺く者」という意味のヤコブから「神が闘う」という意味の「イスラエル」となりました。私たちもその所まで進まなければなりません。自分に頼る一切のものが無くなつて初めて私たちは、証しをするにも、人を導こうとするにも、何を為すにも自分の力により頼まず、主により頼んでするようになるでしょう。そうして、主が私たちを通してお働きになるご奉仕だけが永遠に実を結ぶことを知るようになるでしょう。

私たちは既に自分を厭(いと)い、自分に頼ることがいかに恐ろしいことであるかを知つたでしょうか。

私たちの思いと主の思い。私たちの興味と主のご目的。これらの魂の闘いは生涯私たちにつきまとう

奉仕のための備え

でしょう。私たちは生まれながらに自分にばかり心を配る性質をもっていますので、主イエス様は私たちを訓練の場に導いて、自分の力がどんなに虚しいものかを悟らせてくださるのです。

私たちもパウロと同じように「神の御霊によつて礼拝をし、キリスト・イエスを誇り、人間的なものを頼みにしない」(ピリピ 3・3)者になり、「神に仕えることに關して、私はキリスト・イエスにあつて誇りを持っているのです。私は、キリストが異邦人を従順にならせるため、この私を用いて成し遂げてくださったこと以外に、何かを話そうなどとはしません。キリストは、ことばと行ないにより、また、しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力によつて、それを成し遂げてくださいました」(ローマ 15・17、19)と言うことができ、靈的なご奉仕の備えを主からいただき、キリストのしもべとなることができましたら、まことに幸いです。

## 己の悟りにたよるな、 主に拠り頼め

堀田 満



妻の眞由美さんと

私は一九五八年、兵庫県西宮市で生まれました。中学、高校を淡路島で過ごし、はっきりとした人生の目的もなく大学に進学。両親は、私もいずれは祖父や父のように教職に就いてくれるであろうと望んでいましたが、本人は軽音楽部でバンド活動にのめり込んでいました。ベシストとしてジャズやロックに明け暮れる日々。バンド仲間からドラッグを教わり、その場の感情と欲望の赴くまま、社会的な常識からかけ離れた日常が当たり前になっていきました。

若い男よ。若いうちに楽しめ。若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心のおもむくまま、あなたの目の望むままに歩め。しかし、これらすべての事において、あなたは神のさばきを受けることを知っておけ。

(伝道者 11・9)

大学四年生になった頃、「自分はこのままいたい

な生き方は改まりませんでした。

どうなってしまうのか」という将来への不安に襲われるようになりました。哲学や精神世界の入門書を読みあさるうちに、友人からラジニシというインド人の神秘思想家が書いた「存在の詩」という本を勧められました。分厚い本を二晩で読み終えると、不思議と虚しい心が満たされていました。

(エペソ 2・132)

彼は、既存の組織宗教を批判しながら、人間を救うのは神ではなく、「大いなる存在」によって啓(ひら)かれる個人の悟りにあると説いていました。私は神戸で開かれていた瞑想会を通してインドに行き弟子となりました。一九八〇年十一月のことです。ラジニシは講話の中で、聖書の言葉を巧みに引用し、独自の終末論を展開していましたが、活動の拠点を移していたアメリカのオレゴン州で反社会的、危険なカルト集団に認定され、一九九〇年に病死しました。ラジニシは、終わりの時に現れる反キリスト、にせ預言者の一人でした。しかし、彼が死んだ後も、私の放蕩

一九八一年一月インドから戻った私は、大学を卒業し就職をしたものの二ヶ月で退職。知人のツテで上京し、ロックバンド、ゴダイゴのメンバーらと音楽活動を続けましたが、仕事に対するプロ意識もなく不安定な生活を送っていました。一九八六年、あるライブイベントがきっかけで眞由美と出会い結婚しました。二人の娘が与えられたにも関わらず、他の女性と関係を持ち、家族の思いをふみにじる不貞の罪を重ねていました。

一九九二年、心をあらためて妻とやり直そうと思い立ち、自分の犯した裏切り行為を妻に告白しました。しかし、その時の正直な思いは、妻を思いやつてのことではなく、隠し通せなくなった嘘の重荷から自分自身を解放したいという、わがままなものでした。

そして、その年の五月、眞由美の父が突然の交通事故で天に召されました。今も未解決のひき逃げ事件でした。夫の裏切りと父の死。妻の心は絶望の淵にありました。そんな妻に対して、ただ自分の罪を赦して欲しいと嘆願するだけの、どこまでも身勝手な私に、家族を支えていく自覚はありませんでした。

眞由美は、家族や友人に離婚を勧められながらも、幼い娘たちの将来のために離婚だけは踏みとどまり、娘たちのことを思つて何とか正気を保とうと努めていました。形だけの夫婦、家庭内離婚の状態から家族を再生するために、一九九五年の春、私たちは沖縄に移住しました。沖縄は眞由美の祖父母の故郷であ

り、私は結婚を機に沖縄の歴史や文化について興味を持つようになっていました。

沖縄に移住した頃も、精神世界への興味は失せておらず、祖先崇拜、御嶽（うたき）信仰に心をひかれ、沖縄中の「聖地」を熱心に巡っていました。移住から一年も立たないうちに、関わっていた音楽事業のトラブルに巻き込まれ、精神的に追い詰められていきました。その後、健康食品メーカーに就職したものの、両手の皮膚がただれて血の膿みだらけになる原因不明の病気に苦しめられました。心療内科で転地療養を勧められ、沖縄移住からわずか二年半で東京に戻りました。

その頃から眞由美は、教会に行きたいと言い始めました。「妻の心が慰められるなら」と妻の考えを受けとめつつも、私の中には「キリスト教は偽善的な宗教」という先入観に支配されていました。ちょうどその頃私は、ドイツ人の神秘思想家ルドルフ・シュタイ

ナーの雑誌企画を担当することとなり、その活動を調べていたところ、彼が創設した「キリスト者共同体」が、日本でも活動をしていることを知りました。

シュタイナーは、幼児教育の研究者として知られていますが、その実態は反キリストです。自らの宗教観を「仏教的キリスト教」として位置づけ、自分自身を含めて何人ものキリストの生まれ変わりが地球上に存在したとしています。聖書を正しく読めば容易に見破ることのできる荒唐無稽の話ですが、当時の私の心は完全に閉ざされていて、共同体の活動に深く関わるようになりました。

元来組織に縛られるのが嫌いな私は、「個人の自由意志が尊重され、出入りは自由」という共同体の考え方に共感して、活動に参加していました。ところが、後になって私が沖縄の教会で洗礼を受けたいと共同体の代表に手紙を出したところ、「それは重婚罪で許されない」という返事が帰ってきました。

共同体の本性を知り、心が凍るような強い恐怖に襲われましたが、その時にはじめて、力ある聖書のことばに守られるという体験が与えられました。

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。（ローマ 8・38〜39）

二〇〇〇年の春、転地療養を理由に退社した健康食品の会社に、カフェレストラン開店の計画を機に再就職が許され、家族もふたたび沖縄に越してきました。そして、東京で生まれた長男・蒼生人（たみと）の病気を通して、主は私たち家族の救いと回復の計画を始められました。

二〇〇二年の二月、三歳の蒼生人に川崎病という

小児性難病が与えられました。約一ヶ月の入院後、心臓の冠動脈瘤の後遺症のため通院を余儀なくされました。病院の不誠実な対応とミス。主治医も信用できない中で後遺症をどうしたらいいのかと途方に暮れていた時、蒼生人の出産時に検診してくださいと小児科の先生が川崎病の権威であることがわかり、東京に転院しました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。ですから、私の愛する者たちよ。偶像礼拝を避けなさい。

(1コリント 10:13〜14)

二〇〇二年十一月、東京で精密検査を受けたところ、

ろ、沖繩の病院では八ミリはあるとされた動脈瘤も、その他の後遺症もいつさい見当たらない正常な心臓と診断されました。結果を知らされ私は驚きと喜びで涙がとまりませんでした。祈るべき方を知らなかった私は先祖の神、沖繩の神々に「ありがとうございませう」と心の中で感謝を捧げました。

眞由美はその頃、蒼生人が通っていた幼稚園を運営するプロテスタント教会で聖書の学び会に参加するようになっていました。やがて私も妻を通して、聖書やクリスチャンの証に興味を覚えるようになり、イエス様による罪の赦しを求める者へと変えられていきました。

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ、わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた。わたしは、わたしの名を呼び求めなかった国民に向かって、「わたしは、こた、わたしはこた。」と言った。(イザヤ 65:1)

二〇〇三年六月八日聖霊降臨祭の日に、夫婦共にバプテスマの恵みにあずかりました。その日の礼拝メッセージの主題は、取税人ザアカイの記事でした。

イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」

(ルカ 19:9〜10)

イエス様に見いだされるまでの私は、主に忌み嫌われることしかできない滅びの子でした。どんなに願っても自分の力で家族を回復することのできない絶望の中で、しかも異教の神に救いを求めていたような者を、主は一方的な哀れみと恵みによって救い出してくださいました。

あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださいましたその

大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。(エペソ 2:4〜5)

喜んで通い始めた教会でしたが、ほどなくその喜びは疑念へと変わっていききました。律法的な牧師、形骸化した万人祭司論、礼拝ごとに増していく不安と憤り。教会のあり方もさることながら、苦しいだけの信仰生活の原因が、自分自身や妻の信仰を自分で判断し、さばき続けていることにあることが、その時はまだ分かりませんでした。

主だけに頼り頼む者へと変えてくださるために、主はさまざまな試練を与えてくださいました。業績悪化によるリストラが原因で二〇〇七年に前職の会社を退職。失業保険の支給が最後となる月に現在の職場へと導かれました。しかし新しい仕事を得了喜びもつかの間、自分の知見・経験では解決できない難題

が次々と与えられる中、教会には慰めはなく、不安と極度のストレスに苛まれる日々。女性会の奉仕に疲れ果てていた妻とともに、「私たちにふさわしい礼拝の場を与えてください」と夫婦で祈り始めました。

二〇〇九年の十一月、主は妻の高校時代の同級生を通して私たちをキリスト集会へと導いてくださいました。沖縄喜びの集いでベック兄とお交わりによって、ここが私たちの祈り求めていた礼拝の場であるという喜びと希望が与えられました。

しかし、集会に集うようになってからも、浮き沈みの激しい不安定な信仰生活が続きました。二〇一四年に立て続けに起こされた家族や仕事上の試練によって、「自分の」信仰がいかにもなく、救われてもなおまったく変わらない肉の性質をつきつけられました。海外出張を含む多忙な業務、母の救急入院、その二日後に起きた妻の交通事故、長女の結婚問題……。気がつくと共に祈るところか夫婦の会話を失い、

いる者でした。

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでください。……あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。 (ヘブル 12:2、3)

二〇一四年五月、重症の肺炎で救急入院した母は一週間意識が戻らず多臓器不全も併発し危篤の状態が続いていました。古くからの祖先崇拜と檀家制度を当たり前のように受入れていた母は生前、私たちがキリスト者になったことに反対はしなかったものの、イエス様にはまったく無関心でした。そんな母に聖書の救いを理詰めで納得させようとして口論になり、母が入院するまでわだかまりが残っていました。

「主が許されるのなら、母の意識を戻してください」と祈りながら、病室を訪ねました。母はまだ人工呼吸器をつけていましたが、意識はもどっていて、近づ

不安な気持ちをまぎらわすために主を否み、心の中で繰り返し姦淫の罪。ついには救いの確信を見失うほど霊的な闇に覆われていました。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。

(ローマ 7:18)

ローマ書7章を何度も読み「自分」に言い聞かせました。パウロでさえ、人間は救われても罪の性質は変わらないと告白している。この肉と「自分は」どうつきあっていけばよいのかと、イエス様ではなく自分自身のことだけに意識が向いていました。「イエス様を見上げることを忘れて、現実の問題や自分自身を見つめることは危険です」と、ベック兄がメッセージで話されている危険な状態に私は陥っており、疲れ果てて

くとすぐに私だと分かりました。「心配ばかりかけてごめんなさい。こんな親不孝な息子に、よくしてくれて本当にありがとう」と声をかけると、「ありがとう」と手をさすりながら、「神様に祈っていたよ」と言うのです。神様、という言葉に一瞬耳を疑いながら「神様って、イエス様のこと？」と聞き返すと、「そう、イエス様だよ」とうなずきました。

私からイエス様の話を切り出す前に、母が祈るような仕草で両手を合わせ「祈っていた」と話してくれどとき、「主は生きておられる！」と賛美せざるをえませんでした。病の苦しみの中で、主は母をイエス様の御元に導いてくださったのです。それは、母の意志でも、母の魂の働きでもなく、御霊様が直接母に働いてくださったのです。主は、私のなまぬい信仰に関わらず、母の病を通して母の救いと親子の和解を成し遂げてくださいました。

主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。

(ローマ 10・13)

母は二〇一五年五月十五日に天に召されました。

十七日の聖日、家族や親族、母の友人十五人が参加した葬儀は聖書にもとづいて、賛美と祈り、みことばの朗読、そして、母が病室で救われた証をする機会も与えられました。さらに、長男である私は、実家の相続や先祖伝来の墓の問題に直面していたのですが、もともと気がかりだったのが神棚と仏壇でした。家族の事情で実家に戻っていた妹とも、母が亡くなったら処分しようと、以前から話をしていたのですが、「今がその時」という示しが妻を通して与えられました。「今こそ、妹の息子たち、私たちの子どもたち、皆が揃っている時に、家族全員で仏壇も神棚も燃やしましょう」と、きっぱりとした口調で言う妻。しかし、不信仰な私はためりました。時間が足りない。以

前話をしていたとはいえ、この場でそこまですると、未信者の家族がつかずいてしまうのではと。迷いを払うために祈りました。そして、葬儀の前に妻と二人で祈ったみことばが示されました。

割礼は取るに足らぬこと、無割礼も取るに足らぬことです。重要なのは神の命令を守ることです。

(1コリント 7・19)

神の命令とは、偶像を取り去ることに他なりません。みことばに背中を押され、即席でつくった炉で、神棚や先祖の位牌を燃やしました。母の召天からの三日間。すべては主の御手のうちに不思議な平安に包まれていました。

その年の七月、母が引き継いでいた実家の家屋や田畑、山林、財産の相続放棄を済ませました。理不尽な形で生前の父が被ってしまった借金は引き継ぐ

を信じる信仰によっているのです。(ガラテヤ 2・20)

ことになりましたが、このことも含めて、主の再臨が間近に迫っている今、地上の残りの人生を主にお任せして歩みたいという思いが与えられました。

心を尽くして主に抛り頼め。自分の悟りにたよるな。

あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

(箴言 3・5～6)

キリスト集會に導かれて七年、このみことばを喜ぶことができるようにしてください。主の計り知れない憐れみと恵みに感謝しています。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子

堀田 満  
一九五八年兵庫県西宮市生まれ。

すずらん幼稚園、高木小学校、柳学園高等学校進学部(洲本市)を経て一九八一年関西学院大学経済学部卒業

いかりスパー入社、同年六月退社。一九八二年～一九八六年ベークシストとして音楽活動。一九八六年～一九九五年フリーライターを経て一九九六年株式会社仲善入社、二〇〇七年退社。二〇〇八年株式会社電通沖縄入社。

妻／眞由美、長女／今田萌実、次女／藍音、  
長男／蒼生人

主であるわたくしが神である。  
ほかにはいない

堀田 眞由美



後列左から2番目が夫の満さん、右から2番目が眞由美さん、ご家族と一緒に

神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。私をあなたの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。  
(詩篇 51・10・12)

あなたの神、主に立ち返れ。あなたの不義がつまりきのもとであつたからだ。  
(ホセア 14・1)

あなたはわたしのほかに神を知らない。わたしのほかに救う者はいない。  
(ホセア 13・4)

先日テレビで難民問題のニュースを見ていました。パリ同時多発テロ後のベルギーでの街頭インタビューで、「自分たちはベルギーで生まれ住んでいるのにモロッコ人と言われる。モロッコに行けばベルギー人と言われる。どうしていいのかわからない。どこへ行けばいい

のか」と嘆き憤る若者の声を聞いて、自分も同じだったと思いました。東京にいる時は沖縄の人。沖縄に住んでみれば東京の人、とされ、所在のない思いがあり、心によこんでいました。

私は東京生まれの東京育ちでしたが、沖縄出身の祖父母、父、伯父たちと十一人で住んでいました。家には誰かしら下宿し、沖縄からの来客も多く、近くに親族も多く住んでいました。週末は大勢で食卓を囲み、三線(さんしん)やギターの音色で歌ったり、踊ったり。祖父は琉歌の研究、祖母は沖縄首里の伝統神事、踊合(ラウドウエー)や古謡(クエーナ)の伝承を行う傍ら、東京ひめゆり同窓会の会長としても忙しく活動していました。沖縄南部にひめゆり平和記念資料館設立の際には、東京各地で署名活動・資金調達に奔走し、私も微力ながらお手伝いしました。一九七二年沖縄本土復帰の日には家族そろってテレビの前に正座をして見た記憶もあります。大切に育てられ

ましたが、とても厳しかったです。それは、沖縄の間が東京で生活していくことの大変さを痛感した表れであつたのだと、祖父母も父も逝(い)つてしまつてから理解できました。

一九九二年突然父は交通事故に遭い即死しました。二重三重のひき逃げ事故でテレビでも新聞でも報道されました。あともう少しで家に着く、という場所だったので、事故後の朝には周辺をヘリコプターが飛び、事故内容をアナウンスし、目撃者に呼びかける異例の事態でした。目撃者も現れ車種も特定され、事故が凶悪だつたため多くの警官が動員されました。「日本の科学捜査で97%犯人は特定される」と言われ車も絞り込まれたのに、だめでした。手懸かりのあることを教えてくれた警察の人が翌日には別の部署へ異動となり、話を聞くこともできませんでした。何かおかしい変だと思ひながらもそれを言うことも許されず、時は過ぎていきました。

父は大学で教え、色々な研究機関に在籍し、企業の顧問にも任じていたので、大勢の方が弔問に訪れてくださいました。その中に北朝鮮出身の方がおられ、大きい体で大きい声で泣かれました。そして、「日本にきて間もない頃、先生の研究室に入った。先生は『俺も沖縄出身だ。君の苦労はよく分かる。負けずに頑張（がんば）れ』と言って、毎月の研究室費から工面して数年にわたり援助をしてくれた」と言うのです。母も初めて聞く話だったようです。父は沖縄出身者というだけで苦勞していたことを家族には言いませんでしたが、身近に歴然としてあったことを色々と知りました。

事故直後、警察で沖縄であるが故の差別発言も受けました。何故、と強く思いました。父は様々な逆境にも打ち勝ち、健康で多くの人から慕われ社会貢献もしていたのに。人を殺しても平然と社会生活を送っている人間が少なくともこの世に二人はいる、という

現実を激しく憎む思いが心の中に重く堆積していききました。父の死をきっかけに幼い頃から感じていた社会への違和感、疎外感、自分自身の中にある闇の部分をもぎまぎと見せつけられ、自分ではどうすることもできないことへの絶望が大きくなっていました。ふりかえると大学時代から自分自身の居こちの悪さから逃れようと居場所を求めて彷徨（さまよ）っていました。インドの瞑想グループへ行ったり、ニューエイジの安易に示される精神世界へ行ってみたり。その時にはしごく真面目に関わりとうとするのですが、お手軽で刹那（せつな）的享樂的で無責任なところに真実があるはずはありませんでした。

そのようなものはすべて、用いれば減るものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見え

ますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。  
(「コサイ 2・22～23」)

むなしなことばに、だまされてはいけません。こういう行ないのゆえに、神の怒りは不従順な子らに下るのです。  
(「エペン 5・6」)

小さい頃から、この世界には大いなる存在はいるであらうと思っていました。結婚してからも思うようにならないことも多く、夫の放蕩にもふりまわされました。楽になりたい一心で、キリスト教の教会に行きたいと思うようになりました。しかし、引かれて行ったのはルドルフ・シュタイナーのキリスト者共同体でした。

実を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出さない。  
(「エペン 5・11」)

シュタイナーは独自の教育で知られ、特に幼児教育においては既に一目おかれていました。私たちにも幼い娘が二人いましたし、その教育の根幹を成すキリストの概念にふれるべきだと思いました。

イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私がそれだ。』とか『時は近づいた。』とか言います。そんな人々のあとについて行つてはなりません。」  
(ルカ 21・8)

あのむなし、だましごとの哲学によってだれのとりにこにもならぬよう、注意しなさい。そのようなものは、人の言い伝えによるものであり、この世に属する幼稚な教えによるものであって、キリストに基づくものではありません。  
(「コサイ 2・8」)

そんな中、崩壊寸前の家庭をたて直すべく、仕事も与えられたので二度目の沖縄へと引っ越しました。家族の再生を願って与えられた三番目の子どもが一歳になったばかりでした。沖縄では、シュタイナー教育を学ぶ人たちと活動したり、講演会を主催したりしました。そのうち、近所にあつたプロテスタントの教会の付属幼稚園に息子が通うようになり、そこで開かれていた親のための聖書勉強会に参加するようになって、シュタイナーのキリスト教が聖書とかけ離れていることを知らされました。最後にキリスト者共同体と絶縁する時は少々大変でしたが、夫に与えられた「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」(ローマ 8・38-39)のみことばによって、きつぱりと切られました。

罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。(エペソ 2・5)

教会では罪について語られることはないため救いの確信は見いだせず、ただ奉仕に明け暮れるようになり、心身共に疲れはじめました。

夫は「キリスト者になって罪は赦された」と言っているながら態度を改めようとしません。私もまた、夫に対して我慢してきた思いや父の事件、その後起こされた家族への様々な出来事等で自分の中に巣食っているどうしようもない憎しみ等がまったく解消されず、世の中や自分に対して絶望感がまわりつき、不眠症になり体調を崩しました。このような状況の中、夫は教会から遠のくようになり、私たちは私たちにふさわしく礼拝ができる場所を与えてください、と必死に祈り始めました。

救われない一心で教会へ通うようになり、聖書に触れ、主に招かれていると初めて感じました。

私たちはみな、ただひとりの父を持っているではないか。ただひとりの神が、私たちを創造したではないか。(マラキ 2・10)

私たちの国籍は天にあります。(ピリピ 3・20)

このみことばで、行き場のない思いが解放されました。二〇〇三年ペンテコステの日に夫婦そろって受洗の恵みに与りました。

万軍の主はこう仰せられる。あなたがたの悪の道から立ち返り、あなたがたの悪いわざを悔い改めよ。(ゼカリヤ 1・4)

私の目を開いてください。私が、あなたのみおしえのうちにある奇しいことに目を留めるようにしてください。(詩篇 119・18)

よい分別と知識を私に教えてください。私はあなたの仰せを信じていますから。(詩篇 119・66)

祈り始めて一年くらい経った頃、病気で苦しんでいると聞いていた高校時代の友人がクリスチャンになって元気になり、社会復帰を果たしたと友人たちの集まりで聞きました。嬉しくてすぐに連絡しました。実に二十数年ぶりだったにもかかわらず、時間の壁を超えてすぐ昔のように打ち解け、イエス様のお話を彼女の口から聞くことでとても勇気が湧きました。

友の慰めはたましいを力づける。(箴言 27・9)

主を呼び求める者すべて、まことをもって主を呼び求める者すべてに主は近くあられる。また主を恐れる者の願いをかなえ、彼らの叫びを聞いて、救われる。すべて主を愛する者は主が守られる。(詩篇 145・18～20)

出る喜びでいっぱいでした。

御名を知る者はあなたに抛り頼みます。主よ。あなたはあなたを尋ね求める者をお見捨てになりませんでした。(詩篇 9・10)

その後すぐ、同じ中学、高校に通っていた別の友人から連絡をもらいました。在学中も挨拶程度の仲だったのに加え、高校卒業以来三十二年間まったく話もしなかったのに、昔からの親友のように話がはずみ、イエス様のつきることのない話に嬉しくて、神様の不思議なはからいに喜びました。このような経過を経て初めて吉祥寺集会の礼拝に出席した時、その力強い賛美や熱気に驚くと共に、震えるような喜びを覚えしました。私たちの願っていた真の礼拝を捧げられる場所にたどりついたと確信しました。

主は、愚かで遠回りばかりしてきた小さな者を見捨てずに導いてくださった、と私たちの内側はあふれ

彼らを安らかに導かれたので、彼らは恐れなかった。(詩篇 78・53)

初めてベック兄にお会いしたとき頂いたみことばは、  
ピリピ書 3章13～14節でした。

うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。(ピリピ 3・13～14)

「キリスト教とイエス様はまったく無関係だよ」とベック兄はにこやかに語ってください、光が射し、まさに爽快でした。独りよがりな思いに捕われて手放せずにいたのは、まさしく私自身だと示されました。

まことに、あなたは私のたましいを死から、私の目を涙から、私の足をつまずきから、救い出されました。

(詩篇 116・8)

ともすれば目の前の日常に埋没し、みことばから離れてしまう心弱い者です。淡路島に住んでいる義母が突然たおれ夫が実家に帰っている時に、一人礼拝に出席して帰宅途中に追突事故に巻き込まれました。その後しばらくしてから発症した右肩の激しい痛みが心を悩まし、自分ばかり見るようになってしまいました。義母がイエス様を受入れ安らかに召天し、その恵みを喜んだのも束の間、相続放棄や諸手続、親族の借金問題等、頭を抱える問題が起きました。納得いかずつぶやくばかりでした。

成人になった娘に、父の事故の真相を話し、今もその車種を見ると苦しくなると話すと、「そんな思いを持ち続けて大変だったね。でも犯人にはもう天罰が下(くだ)っているかも知れないじゃない?」と言われてハッとしました。自分ではどこかで犯人が勝ち誇って普通に生活しているのでは、と思っていたのです。

悪を行なう者に対して腹を立てるな。悪者に対してねたみを起こすな。悪い者には良い終わりがなく、悪者のともしびは消えるから。

(箴言 24・19～20)

愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」

(ローマ 12・19)

この世は理不尽なこと、不条理でいっぱいです。どうしてこのようなことが我が身に降りかかるのかまったくわかりません。

人の歩みは主によって定められる。人間はどうして自分の道を理解できようか。

(箴言 20・24)

理由などわかるはずはなく、そしてそこに目をむ

ける必要もない、すべては主がなしとげてくださるからということをやっと知り得ました。

これもあれも神のなさること。それは後の事を人にわからせないためである。

(伝道者 7・14)

少しでも自分の思いが入るとみことばが遠のきます。「すべて主から」と受け止められるのは、何と幸いなことでしょうか。主がすべてをなしとげてくださるのだ、と思えるのはなんと慰められることでしょうか。

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

(ヘブル 12・11)

人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。

(詩篇 37・23～24)

何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい。

そうすれば、これらの物は、それに加えて与えられます。

(ルカ 12・31)

朝に晩に夫と共に賛美し、聖書を読む時も与えられ、ただただ感謝です。共に賛美できるということは私たちには奇跡そのものです。いいことも悪いこともあります。その判断は人間のものであり、主の思いははるかに違うということを多々知らされ、いつもイザヤ書55章を示されます。その一つが息子の学校でのことです。親はその理不尽さに腹を立て感情的になりましたが、当の本人は「イエス様だったらど

う思うのかな？」と心が守られました。目の前で起こったことは私たちには最悪でも、その中からイエス様は息子の主の道へとしっかり導いてくださいました。どんな時でも主は御存知で最善をなしてくださいました。

あなたがたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

(箴言 3・6)

怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。

(詩篇 37・8)

あなたがたが神のみこころを行なつて、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です。

(ヘブル 10・36)

私たちが今まで出会ってきた様々な大勢の人々のことを思います。真実なる神様を一日も早く知ることができ、この世にあっても希望があると喜べるようになってほしいと祈るばかりです。

神は、すべての人が救われて、真理を知ることになるのを望んでおられます。  
(1テモテ 2・4)

私の心の思いが神のみどころにかないますように。私自身は、主を喜びましょう。罪人らが地から絶え果て、悪者どもが、もはやいなくなりますように。わがたましいよ、主をほめたたえよ。  
(詩篇 104・34〜35)

堀田 眞由美

一九五八年東京生まれ。

桐朋女子中学校・高等学校卒、玉川大学農学部卒。

夫／満、長女夫妻／今田宰聞(さいもん)、萌実(もえみ)、次女／藍音(あいね)、長男／蒼生人(たみと)、母／見里静子

## 解放奴隷

石黒 郁彦



右から郁彦さん、妻のまりさん、次男の守さん、長男の光さん

彼(イエス様)に信頼する者は、失望させられることがない。  
(ローマ 10・11)

光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。  
(ヨハネ 1・5)

これらのことをあかしする方がこう言われる。「しかし。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。  
(黙示録 22・20)

一つ目のみことばは、妻から最初にもらったしおりに書いてあった言葉です。後の二つは結婚指輪に刻まれています。

一九九四年ごろ、私は友人たちと事務所を借りてフリーのグラフィックデザイナーとして働いていました。あるとき、仕事が終わってから皆で飲みに行った席に、友人の友人として、後に妻となる「まり」がい

ました。帰宅方向がやや同じであった私は、彼女を途中まで見送ることになりました。その時もらったしおりに前述のみことばがありました。しおりはしばらく事務所の机の上にありましたが、特に心にも止まらず、彼女と再び会うこともなく、日々がすぎて行きました。

半年くらい経ったある朝、母からの電話で父の死を知りました。駆けつける途中も、病室での再会も、落ち着いた中に自分があるのが不思議でした。仏式の葬式が始まり、悲しんでいる大勢の人を見ながら、どういう訳か「人は、死んで終わりではない」という確信が心の中にあり、涙も出ませんでした。むしろ父が長年の病から解放されて「良かった」とさえ思えたのは不思議なことでした。では死んだらどうなるのか。この疑問が残りましたのでお坊さんに聞いてみました。すると「確かなことは誰にもわからないのです。何故なら、そこ(死後の世界)に行つて帰つてき

た者はいないからです」と言われました。しかし、私の中の「死では終わらない」という確信はずっと残り続けました。

そんなことがあった年の瀬、再び友人たちとの飲み会で彼女と会えました。私のそんな状況は友人から伝わっておりしたので、祈られていたと思います。

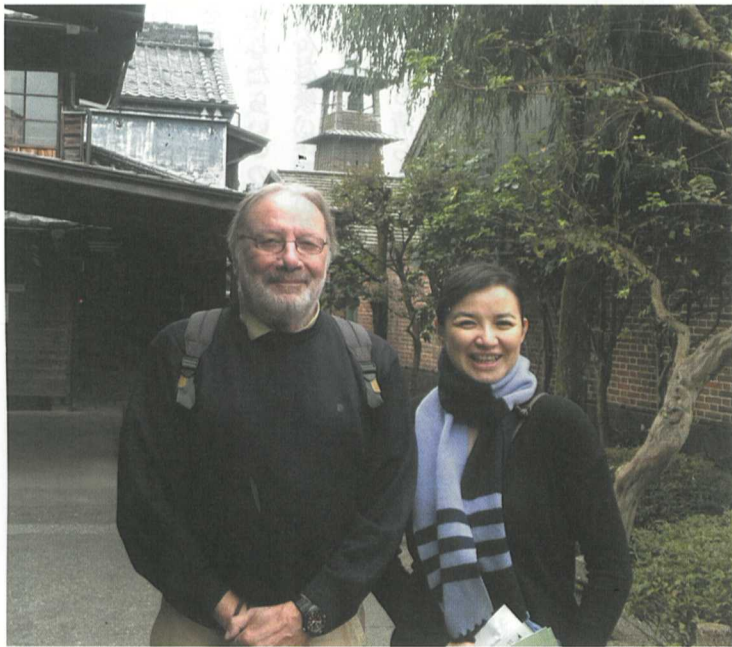
ある時、彼女から友人に渡されていた彼女の「証のテープ」を「石黒も聞いてみると良いよ」と手渡されました。証の内容は当時の私には過酷に聞こえたので、感想を聞かれた時も言葉もありませんでした。それから親しくなり、「兄弟姉妹」と呼び合う方たちの群れに入っていくこととなりました。

しかしその群れの中にいるのは非常に窮屈(きゅうくつ)に感じられて身の置き場もなく、いつもいやだなという気持ちがありました。喜びも悲しみも、イエス・キリストとはかわりのない場でしか感じられなかったし、主を求める思いにはなりませんでした。

私にとっては、日常の浮き沈みが現実であり、結果であり、聖書の言葉に判断の基準を置いたり、祈ったりするということは非常に儀式的なものにしか感じられず、群れの中にあることには「役にたたないもの」に時間を費やす」という感覚がありました。「早く終わらないかな。もったいないな」という感じです。気持ちのついていけない、そんな状況の中、確信もなく結婚へと踏み切りました。そしてなんと十二年間もそんなあやふやな気持ちで過ごしていました。(しかし十二年も集えたのは「イエス・キリストが真実である」と薄々と感じていたからです。)どうにもならない気持ちには積もり積もって、「このままではやってられない」という苦い思いから、「どうにかならないものか」と祈るようになりました。

そんなある日、私に投げかけられたのは「そのままが良いよ」という主からの答えでした。主が語られていることは、「良くなりなさい。学びなさい。みこころ

を選び取らなければ滅びます」(それまでの私にはそう聞こえていたのですが……)という宗教的な、自分で選んで這(は)い上がっていく窮屈な道ではなく、「良くなろうとしないでいい。学ぶもんじゃない。みこころは選ぶものではなく、わたしが与えるのだから安心して受けたいよ」という、二方的な恵みであると知らされたことで、生きることの束縛からの解放への入り口へと導かれました。今の私を取り巻く、目に見える状況の中に「恵みや祝福」を見つけたそうとする。こと自体が的外れだと知りました。私の救いこそが恵みであり、祝福です。目の前の状況はずっと悪いままでも、主とともに歩めるのが恵みですし、それ自体が祝福です。それが事実でしょう。むしろ目に見える、変わらずに継続している悪い状況こそ、主の十字架の死と復活と再臨をかけがえのない事実として受け止めさせてくれるのです。この先、この世の見えることで泣くようなことが起きようが、うれし



お父さまのロレンソさんと

## 悲しむ者は幸いです

石黒 まり

くてたまらないことが起きようが、もはや私にはまったく「知ったことではない」ということができます。ただ、自分を過去からも未来からも解放してください。主、この方について行きたいのです。そこには、悔やむことも心配することも必要ではなく、自分というもののようにもコントロールのつかない者をコントロールする必要もない、そうしたことから解放されているという事実があるからです。

「したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」(ローマ9・16)と書かれているとおりです。この時からイエス・キリストは私にとって「主」となりました。主は、私にとつて「主人」であり、その栄光と権限と責任は「主」にあります。「主がなさることだけが成り立ち、主がなさらないことは起きない」。この絶対的なご支配を認めざるをえない、と言うと傲慢(ごうまん)でしかありませんが、そのようにしか表現できません。そ

れが現実であり、愛を土台とした完全なご支配こそ平安のみなものです。もはや私の方には何も残っていないことを知るにつれて、次々と解放していつてくださっていると知ることが喜びであり、他には何もありません。

石黒郁彦

一九六三年十二月二十二日生まれ、埼玉県川越市で育ち、現在は神奈川県川崎市に在住。

妻／まり、長男／光、次男／守

イエス様との出会いは、一冊の本がきっかけでした。細かい内容は覚えていませんが、その本を通して初めて、罪というものを意識したのかもしれない。一九九三年、二十五歳のときです。一人暮らしをしていました。両親とは表面的には何とかやっていましたが、心の中は辛かった苦しい家族関係の思いでいっぱい、そこを見ないように、過去に蓋(ふた)をして生きていました。過去のことだけでなく、家出をして一人で生きて行くことにも疲れきっていました。心の中は暗闇と孤独でいっぱいでした。ずっとそこにいれば私はどうなっていたでしょう。イエス様が私を導いたのは、そういうころでした。

もしあなたのおおしえが私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で滅んでいたでしょう。(詩篇 119・92)

その本を通して、法律を犯さなくても、心の中に

抱えている思い、それが罪らしい…と知ったとき愕然（がくぜん）としました。私には衝撃的でした。自分にしかわからない、でも決して逃れることのできない、心の中から湧き上がってくるさまざまなこと。そこを問われて、罪がはつきりあると言われたら、私はどうしたらいいのかわからなくなりました。その本を読んだ後、作者がクリスチャンであることを知り、聖書のことを知りたいと思うようになりました。そこにとっても清らかなものを感じたからです。

中学のときからの親友がキリスト集會に集っていて、ときどき私を集會に誘ってくれましたが、いつも断っていました。彼女の結婚式にも出席し、宣教師さんが福音を語っていたはずですが、私の耳は閉じていました。でも今度は、自分から行きたいと言いました。ただ、一年後にはイエス様を信じるようになるのは想像もしていませんでした。ベック宣教師さんとも個人的に話しをしました。イエス様は私の心を開い

心から思いました。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。…泣くのに時があり、ほほえむのに時がある。…引き裂くのに時があり、縫い合わせるのに時がある。黙っているのに時があり、話をするのに時がある。

（伝道者 3・1、2、4、7）

最善のときに、イエス様を信じて生きるように変えられたのだと思います。聖書のみことばの二つひとつが心に入ってくるようになりました。自分一人で生活していた私は、将来のことや、世の中に対する漠然（ばくぜん）とした不安がありました。でも、聖書には「あすのための心配は無用です。」（マタイ 6・34）とあったのでびつくりしました。このみことばが、自分のものになっていくのは本当に嬉しいことです。でも、その

てくださって、イエス様ご自身を私に与えてくださったのです。

それまで一人暮らしをしていた私は、何かの物音で夜に目を覚ますと、ドキッとしてずっと耳をすませたり、自分の安全は自分で守らなければと気をはっていました。イエス・キリストという存在を心で知ったその日から、安堵（あんど）感につつまれ安心して過ごせるようになりました。この違いはとても大きいものです。一人と思っていた私は二人、いつもいつも神様であるイエス様がずっと一緒にいた、これからもずっと一緒にいる。

イエス様を信じ始めて一か月後には、生まれてから一度も会ったことがなかった実の父と、初めて出会うことができました。父の住所も連絡先もわからなかったのに。イエス様は全部ご存知ですから、最善のときに最も必要なことをくださいました。

そのあと、次のみことばを知って「本当だな」と

一つ前のみことばには、恐れも感じました。

だから、神の国とその義とをまず第二に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのもの（あなたがたに必要なもの）はすべて与えられます。（マタイ 6・33）

当時はまだ、神の国とその義とを第一に求める、と言う状態ではありませんでした。しかし、後になって、罪の赦しや、十字架でイエス様が私の罪のために死んでくださったこと、もう罪に問われないこと、そういった自分自身を責めることからの解放を経験しましたので、今は、私の中で生きて働いておられるイエス様に、安心して求めています。

イエス様を信じて数年後の一九九六年に夫郁彦と結婚しました。先に結婚した親友と、同じように、イエス様を土台とした結婚ができたことは本当に感謝でした。それは、問題がなく結婚生活を送れる…か

らではなく、結婚生活を通して起こるさまざまな問題に対して、すべてをイエス様から受け取っていくように夫婦で変えられていったからです。私たちのことを、本気で「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」(イザヤ 43・4)と言ってくださっている方から受け取れるからです。

子育て、子どもの学校での問題、夫婦の問題、経済的困難、夫の自己破産。生まれたての幼子のようにだったお互いの信仰は、イエス様によって練られていきました。

今も私たち夫婦は全然ダメです。イエス様がないと。でも、イエス様はずっといてくださるので、ダメなところを見ず、主を見上げて生きています。子育ても、すべて思うようにいかない…ことの連続でした。「イエス様だけだよ」と集会で言いながら、家に帰ると子どもたちに、この世の基準で迫ることが私にはいっぱいありました。主は、そこをはっきりと見せて

何ごととも主から受け取るべきことを知ることができるのは、幸いだとしか言いようがありません。今は、自分を責めることはしません。もし責め始めていたらそれは、私がイエス様の十字架での贖いの事実から目を離しているときです。私が負うべき責めはイエス様が肩代わりしてくれたのです。今も、これから、です。それを思うといつだって礼拝せざるをえません。世の中のさまざまなニュースや情報に左右されないというのは、なんと自由なことでしょうか。「真理はあなたがたを自由にします。」(ヨハネ 8・32)というみことばの通りです。

イエス様から、そして聖書から目を離せば、あつという間に落ち込みます。「人の心は何よりも陰陰で、それは直らない。」(エレミヤ 17・9)とありますから。でも、イエス様はありのままの私を愛してください、夫を愛してください、息子たちを愛してください、導いてくださるので、心配する必要はないのです。

くださり、子どもの問題ではなく、私が本当にイエス様に信頼しているかどうかの問題だということを、示してくださいました。あんなにイエス様と出会って安心していただのに、子どもの将来のこととなると、不安を先取りし、自分で作り上げた不安感から、そうならないように、今、これをしなきゃ、あれをしなきゃと一人で焦(あせ)って動いていました。聖書に、「信仰から出ていないことは、みな罪です。」(ローマ 14・23)とありますが、その通りです。信仰から出ていないことをしても、私も子どもの心も平安になりようがありません。それをいつも示してくれていたのは夫でした。夫はイエス様から受け取っていたので、すべての責任は主が取ってくださいということ、私に教えてくれました。

人の道は主の目の前にあり、主はその道筋のすべてに心を配っておられる。  
(箴言 5・21)

昨年夏、私は病気が与えられました。発作性心房細動というものでした。発作が起きると苦しいのですが、それによってわき起こる何とも言えない不安感がまた心を苦しくさせました。発作のときは、弱さ惨めさが現れる瞬間です。「信仰はないの?私」となります。みことばに、「信仰の創始者であり、完成者であるイエス」(ヘブル 12・2)とありますが、私の中で信仰を創始して下さって完成してくださるのは、イエス様ご自身でした。私ではありません。病気の前の年、夫の自己破産を通して、初めてそのことを体験しました。それがわかったときほっとしました。私が頑張らなくていいんだ。できないんだと。そしてこの病気のときにも。次のパウロの証がそのままあてはまります。

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現

われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

(2コリント 12・9)

この病気はすぐに治るものではないので、「弱いままでいいのだ」というイエス様からの恵みを体験中です。病が与えられたことによって、実父との深い交わり、また初めて一緒に祈ることも主は備えてくださいました。家族の救いは主の約束ですから、本当に感謝です。

死に対する漠然とした恐怖感からの解放も、イエス様はしてくださいました。あるとき集会で、メッセンジャーの二人の兄弟の会話をそばで一緒に聞いていました。若い兄弟が、「ぼく死ぬのが怖いんですね」と言い出しました。「だって経験したことがないから、やっぱり怖いじゃないですか?」。年上の兄弟の方はそれに対して、「そうですか?。でも、本当は違う。

うに変えられていきました。

「病気を王様にしないでね、人は死ぬまで生きるから大丈夫だよ」と、ベックさんが話してくださいました。夫婦でそれを聞くことができて感謝です。

私に病名を告げるとき、先生は「うーん、どうやって説明しようかな」と、ちょっと悩んでいるようでした。四年前に大学病院でさんざん検査しても何もわからなかったし、今回も病名はつかないだろうと、待合室で夕飯の献立を考えていたくらいでしたので、「あつ、病名がわかったんだ、え?でもそんな悩むほど大変なの?」と思います。その一瞬の間に、祈りました。「病気を通して、どうか主のご栄光が現されますように」。不思議と、「どうか治してください」とは思いませんでした。病気は治すために与えられるんじゃないと思えたからです。栄光が現されるために、病気を治すことが必要なら、主は簡単にそうしてくださいさるから。最後に、私たち家族の原動力になっている、日々生

周りから見たら、あつ今死んだのかと思うけど、本人は目をつむっただけで、次の瞬間は目の前にイエス様がいるんですよ。だから聖書には、死んだ人のことを眠ったと書かれているんですね。そういう表記がいっぱいありますよ。つまり、本人は死を味わわないんですよ。『え?ぼく死んだの?これが死?』。本人は死を味わっていない。『さっきまで、ぼくは病院のベッドで寝てたけど。え?イエス様が目の前に……』。それ聞いていた若い兄弟の方は、「でもやっぱりぼくには怖いです。経験してないから」。年上の兄弟は最後にこう言いました。「ぼくも経験していません。でも、聖書はそう言っています。『眠った人たち』と。選ぶのは自由です」。私は横で聞いていてびっくりしました。どんどん心が軽くなっていった、何の重荷も足かせもなくなっていました。「聖書がそう言っている」、このことを素直に受け取れるということは、何という恵みなのでしょう。イエス様によってそのよ

きていくための土台となっているみことばで終わります。私たちの結婚指輪に刻まれているみことばで、最愛の夫が選んでくれたものです。

これらのことをあかしする方がこう言われる。「しかし、わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。

(黙示録 22・20)

石黒まり

一九六八年一月七日、ドイツ、シュトゥットガルトで生まれる。

東京育ち、現在は神奈川県川崎市に在住、専業主婦。

夫・郁彦、長男・光、次男・守